

# 連携を生かす 柏市の学校図書館

—③千葉県柏市教育委員会

学校図書館機能を  
強化する  
支援センターと  
ネットワーク

渡辺 暢恵

## 1. 学校図書館の位置づけ

柏市は、千葉県北部、東京への通勤圏に位置し、人口は40万5,593人（2011年5月1日現在）、中核市として地域の推進を担っている。2004年度に沼南町と合併し、小学校41校・中学校20校となり、新体制の中、学校図書館活用の新たな展開が始まった。

柏市学校教育指導の指針は、「生きる力と夢を育む」を目標に、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」「輝く個性」を四つの柱としている。学校図書館は「確かな学力」の中に位置づけられ、思考力、判断力、表現力等の育成をめざし、整備と活用が進められている。

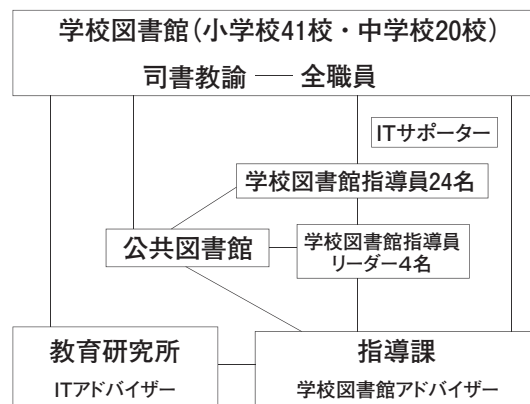
年3回の柏市学力向上プラン推進委員会では、教育長をはじめ教育委員会の各課、PTA、地域ボランティア、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、校長、教頭、教務主任の代表、ITアドバイザー、学校図書館アドバイザーが参加して学力向上に向けての取組みを協議し、学校図書館の活用の現状報告と、今後に向けての提案などが行われ、各学校での実践につなげている。

2009年度には、文部科学省の指定事業「学校図書館の活性化推進総合事業」を受け、モデル校を中心にICTと連動した学習・情報センター機能を備えた学校図書館の推進を図った。さらに2010年度には「学校図書館の有効な活用方法に関する調査研究」の研究指定を受け、児童生徒の自主参加を募り、学校図書館や公共図書館のことに学ぼう「子ども司書養成講座」を開催して「子ども司書認定」を行った。これらの成果を継続して行われるように進めている。

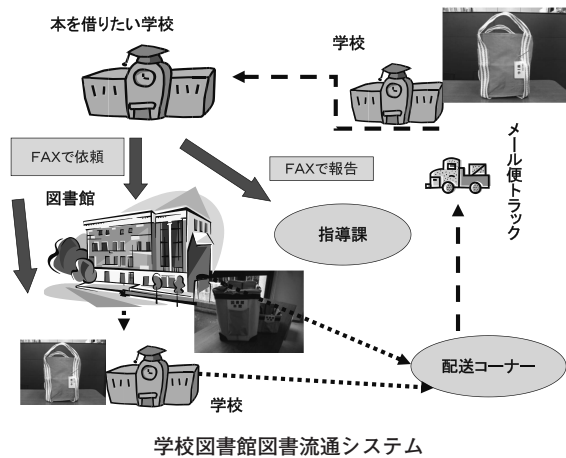
## 2. 学校図書館の整備

柏市では、2004年度に蔵書のデータベース化が終了し、全校に学校図書館指導員を配置、学校図書館アドバイザー1名とITサポーター1名の支援を加え、教育委員会指導課、公共図書館が協力した推進体制を整えた。さらに、2008年度からは、全学校図書館の整備と活用が全校で推進されるように、学校図書館指導員をグループに分け、それぞれのグループにリーダーを立てた。グループ内で相談したり、助け合ったりでき、また市教委からの連絡事項がリーダーを通じて一人ひとりに行き届くようになった。

リーダーは定期的にリーダー会議を行い、現在の各校の様子や課題と解決方法などを話し合っている。年数回は、担当指導主事、学校図書館アドバイザーも入り、研修会の内容と今後の方針などを協議している。



柏市の学校図書館の体制



2008年度からは、上の図のような流通システムを構築して、公共図書館や学校間の相互貸借により授業に必要な図書を集められるようにしている。既に教育委員会と学校間で運行していた文書配送便を活用しているため、必要な経費は運搬用の袋のみに抑えられた。

次の表は、始まって3年間の学校図書館図書流通システムの利用状況である。利用回数は年々増えているが、利用冊数は減っている。これは、各学校で毎年使用する本は公共図書館や他の学校から借りるのではなく、購入することを呼びかけているためである。つまり、それぞれの学校で計画的な購入が進んでいることを表している。

年度	利用回数	利用冊数
2008年度	327回	6,501冊
2009年度	556回	6,636冊
2010年度	682回	4,925冊

学校図書館図書流通システム利用状況

学校間で借りた場合は、本を返す際に、できるだけ指導案や児童生徒の作製物をフィードバックするなどして、図書資料の有効な活用方法を広めることを司書教諭、学校図書館指導員に依頼している。

### 3. 学校図書館指導員の連携

柏市の学校図書館指導員は、開始時期から一人ひとりの責任感と協力性を高めるため、一人一役、係を決めている。2011年度は、学校図書館指導員

全員が寄せる毎月のおすすめ本のリスト、自主研修会、著作権、掲示、学校図書館だより、親ぼう会の担当が分担されている。

学校図書館だよりは、毎月小・中学校の担当1名がサンプルを書いて、メーリングリストで送る。それをもとに、各学校では、司書教諭と相談のうえ、作成する。例えば、今年の課題図書の紹介はすべての学校で共通して使い、図書委員会の活動紹介は各校の内容を書く、というように学校独自のものに仕上げる。これにより、柏市の小・中学校では、全家庭に学校図書館だよりが配布されている。学校図書館だよりと今月のおすすめの本はホームページ「学校図書館オンライン」で公開している。

また、レファレンスサービスにもメーリングリストを活用している。依頼内容を、メーリングリストで問い合わせると、さまざまな回答が寄せられる。その後、全員が同じ情報を共有できるので、同様の依頼があったときに紹介できる利点もある。

各学校での活動の状況は指導主事とリーダーが把握し、課題に対して即座に対応することができる。新しい学校図書館指導員に対しては、リーダーが直接学校に出向き、コンピュータの操作、授業の支援のしかたなどを伝える。学校図書館指導員を孤立させないこと、全員が同じレベルの仕事ができるようにすることと同時に、学校の方針にあわせた独自の方法も考え、それを広めていく。

その一つの例が新着図書展示会である。新しく購入した図書を図書委員会の児童生徒が学校図書館に展示し、閲覧できるようにしている。2005年



柏市ホームページ 学校図書館オンライン  
(<http://www.edulab.kashiwa.ed.jp/tosyo/index.htm>)



中学校の新作図書展示会

に中学校1校で実施されて以来、ホームページと研修会の実践発表で各学校に広まり、今や柏市の小・中学校の恒例行事となっている。学校によっては、各学級1時間ずつ手にとって読む「味見読書」を実施している。

#### 4. 授業での活用を進めるために

##### (1) 学校図書館活用オリエンテーションを全校で実施

2005年度に現在の制度が始まって1年経過したときの課題として、学級間、あるいは学校間の温度差があった。また、学校図書館指導員の配置日数、配置時間が限られている中で、全学級にかかわることが困難なため、一部の学校で、バーコード化された学校図書館の利用方法が定着しない実態も見られた。

そこで、2006年度より全学級で学校図書館の利用を進めるため、オリエンテーションの計画的な実施を呼びかけ、2007年度からは教育委員会指導課から学年別の指導案を配布し、啓発活動を行った。

その指導案は、教諭をT1、学校図書館指導員をT2とするチームティーチング形式で、校内の計画は司書教諭が立てる。小学校低学年は本に親しむこと、中学年以上は調べ学習につながる情報リテラシーを得ることを目的として行っている。中学校1年生のオリエンテーションでは、校長先生、教頭先生をゲストティーチャーとして迎え、本を紹介してもらうことも入れているため管理職の理解も得られるようになった。この時間に各教諭と学校図書館指導員が、簡単に今年度の打ち合わせもできることで、利用状況が改善されてきた。

##### (2) 学校図書館アドバイザーが授業を支援

制度を開始したとき「学校図書館を活用した授業のイメージがわからない」ということが言われたため、学校図書館アドバイザーがモデル授業を各学校で実施した。事前に司書教諭、教諭、学校図書館指導員と打ち合わせをし、指導案を用意した。当日は校内研修会をあわせて持つ学校も多く、しだいに授業のイメージ化が図られた。

授業に取り上げた内容は、ブックトークを入れた読書指導の進め方、ブレインストーミングを入れたテーマづくりで効果を高める調べ学習、新聞の活用、図鑑、百科事典の活用、著作権の指導など、各学校の要望に応じたものや今日的な課題等である。モデル授業で実践したことは年度末に資料として全校に配布した。

また、学校図書館を利用する研究授業を予定する教諭とは、どのように活用すると効果的か、どんな本が必要か、コンピュータは指導課程のどこで活用するかなどを協議した。その成果は教育委員会が主催している柏市教職員教育実践記録論文でも発表されている。

##### (3) 読書会の推進

2008年度より、さらに豊かな読書ができるように、読書会を進めている。読書会は同じ本を学級全員が読んで感想を話し合う形式で進めている。

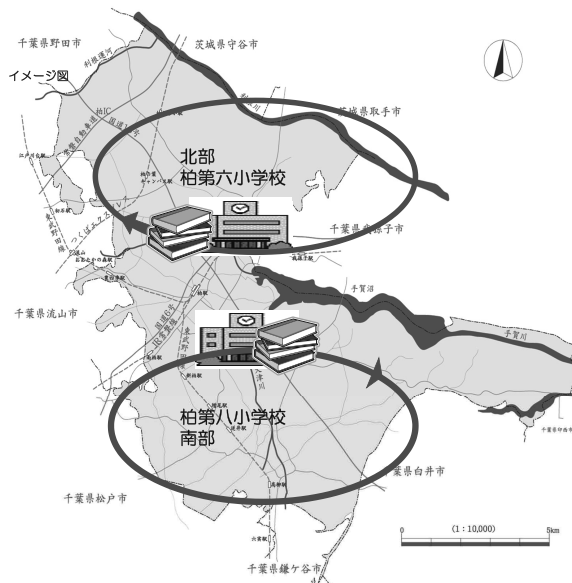
これも学校図書館アドバイザーと学校図書館指導員が先生がたと協力して実験的な授業を重ね、協議し、司書教諭研修会では実際に体験することなどを通してより効果的な指導方法を検討し、実施回数も年々増加している。

2009年度には、前述の文部科学省指定事業の予算で、小学校1年生から6年生までの朝読書や読書会用の本を40冊ずつ2セット購入し、市の北部と南部でそれぞれ回して使用することを開始している。

読書会について、「児童生徒間でのコミュニケーションが深まり、読書意欲が高まる」などの感想が実施した教諭より寄せられている。

##### (4) 司書教諭の実践と成果の共有

年に2回の司書教諭研修会では、これら実践した内容を紹介し、司書教諭、学校図書館指導員に発表してもらい、他の学校でも行えるように広め



読書会用の本を北部と南部で共用し、市内の小学校で巡回させる

ている。

また、司書教諭は全員、実践を行った成果をレポートにまとめ、年度末に実践事例集を作成している。それをホームページにも公開し、他の学校が参考として見られるようにしている。

### 5. 公共図書館との連携

学校図書館図書流通システムは、当初、公共図書館から図書を借りることからスタートした。開始当初は利用する学校に限られていたため、利用が可能であったが、しだいに公共図書館だけでは対応できなくなり、学校間の貸借も進めてきた。この間、公共図書館側に大きな負担をかけたが、献身的に学校図書館をサポートしてもらった。

2010年度の「子ども司書養成講座」による子ども司書の認定は、公共図書館司書と指導課の協力体制があって実現したことである。目的は、司書の活動に関心を持ち体験する「子ども司書」を育成し、本に親しみ活用する活動を、学校や家庭、地域に広めることである。小学校19校・中学校7校、210名の参加があり、各学校で図書委員として、また図書委員への協力者として活動している。公共図書館のベテラン司書が講師となり行った「子ども司書会議」も好評であった。

### 6. 保護者ボランティアの協力

各学校では、保護者ボランティアが学校図書館指導員に協力して、学校図書館の整備をし、読み聞かせなどで児童の本への興味・関心を高めている。学校図書館指導員が保護者ボランティアへ助言をし、また労力を提供してもらうことでさらに活動が充実したものになることが実証されてきている。特に、蔵書点検、本の修理など、市内全校で完全に実施できるようになり、環境が整うことで利用状況もよくなってきている。

### 7. 柏市の学校図書館の成果と課題

柏市の学校図書館の制度はすべて連携で成り立っているとと言っても過言ではない。メーリングリスト、ホームページなどICT関連は教育研究所、学校図書館にかかわる全般は指導課、図書流通システムは公共図書館の協力があって実現し、学校図書館指導員、司書教諭、各学校の管理職を含めた全教諭と保護者が知恵を出し、力をあわせて子どもたちのよりよい成長のため、学力向上のため、連携をしている。これらが、大きな学校図書館支援センター的な組織として機能している。この成果は、児童生徒への図書の貸出冊数、学校図書館を利用した授業の回数など毎年の統計に如実に表れている。

今後の課題は、「柏市学校図書館運営マニュアル」を有効に活用し、どの学校も同じレベルを維持すること、さらに各校の教育目標の実現のために特色ある活動も加えることである。そのためには、学校図書館指導員が1校に毎日勤務できること、全校で司書教諭が活動できる時間を確保することが望まれる。

(わたなべ・のぶえ=東京学芸大学非常勤講師、柏市学校図書館アドバイザー)



「柏市学校図書館運営マニュアル」(2009年作成)